清河八郎「回天の道」

「元気・まちネット」踏査後半 同行記

庄内町出身の幕末の志士、清河八郎Qは1847（弘化4）年、郷里を出奔し江戸を目指した。東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）は、その県内ルートを「回天の道」と名付け、鶴岡市出身の作家藤沢周平さんの小説「回天の門」の記述を手掛かりに検証。去年9月に庄内町清川から鶴岡市田麦俣までをたどったのに続き、今月、田麦俣から上山市までを踏査した。以下は踏査後半の同行記。

（文＝村山支社・伊藤哲哉、写真＝報道部・堀川貴志）

「六十里越」の歴史感じ

多層民家に泊まり出発

1 田麦俣

清河八郎は江戸で学者になるため生まれ育った清川村（現庄内町）の家を出た。「回天の門」によると、八郎は清川から肝煎（同）に出て山道を現在の鶴岡市添川に抜けた。さらに手向を経て松根から六十里越街道に入り、その日のうちに田麦俣を通過して山中の笹小屋に泊まった。峠など難所の多いルートを1日で40キロ以上も歩いた。

「まちネット」の矢口代表（63）は旧新庄工業高を卒業して東京で就職した。「（数え年で）18歳の時に家出して江戸を目指した八郎は、どんな思いで六十里越街道を歩いたのだろうか」と矢口さん。

今回の踏査は、六十里越街道の田麦俣から西川町弓張平まで約18キロを1日で歩いた後、寒河江、上山を目指す。八郎が家出した日を今の暦に置き換えると6月14日。日程もほぼ同じ時期に設定した。

事前準備として隊員らは出発の前日、六十里越街道の保全や街道を生かした地域おこしに取り組むアルゴディア研究会（小関祐二会長）のメンバーから話を聞いた。

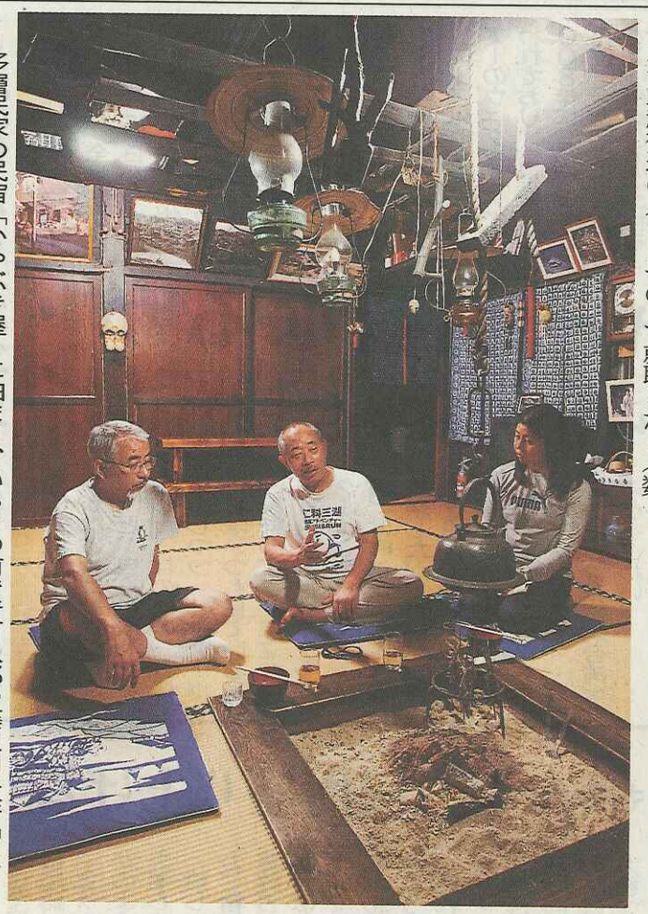
1200年の歴史を持つといわれる同街道は、本県中央を横断し、出羽三山への信仰の道、庄内と内陸を結ぶ物流ルート、また時には戦乱の世の軍路として大きな役目を果たしてきた。特に出羽三山はかつて東日本最大の霊場とされ、東北はもちろん関東、北陸からも大勢が訪れた。時代が変わり街道は廃れたが、歴史・観光の地域資源として古道が見直されている。

同研究会は鶴岡市朝日地域の商工会や地元有志が中心となり2002年に発足した。「一緒に歩こうよ」という意味の庄内弁とアルカディア（桃源郷）を掛けた名前だという。荒れていた古道の草を刈り、石碑や一里塚、茶屋跡を復元して案内看板を立てる一方、山船頭人と呼ぶガイドを養成し、春から秋まで多彩なトレッキングイベントを展開している。

「リピーターを呼ぶのは人。景色だけでは繰り返し来てもらえない」と小関会長。同会事務局長の安達一春出羽商工会朝日支所長は「この活動を百年続け次の世代につなげたい」と話す。他のメンバーからは「清河八郎は江戸に出た後も何度か清川に帰っている。ガイドを通じて街道を歩いた人たちの面影を出せたら、もっと魅力が深まる」との声も。田麦俣―弓張平の踏査に対しては「いつも案内しているコースの2日分の距離。大変だが時間をかければ歩ける」と励まされた。

踏査後半のスタート地点は前半の終点となった田麦俣。六十里越街道の重要な中継地で、江戸時代には約30軒あったうち7、8軒が旅籠（はたご）だったという。矢口代表ら4人の踏査隊は多層民家の民宿「かやぶき屋」に泊まり、翌日の早朝出発した。

多層民家は谷あいの豪雪地という土地柄と養蚕に適した独特の造りだが「田麦俣には隣の旧遠藤家住宅（県指定有形文化財）を含めて2軒しか残っていない。人が住んでいるのはうちだけ。民宿は国道112号月山道路が開通した約30年前に始めた」と主人の渋谷一志さん（58）。「出羽三山の行者が持つ金剛杖（づえ）はブナなど樹木の根を傷めない」という渋谷さんの勧めで、矢口さんは金剛杖を借りて歩くことにした。



多層民家の民宿「かやぶき屋」に泊まり、いろりの前で清河八郎や藤沢周平作品について語り合う「元気・まちネット」のメンバー＝鶴岡市田麦俣

清河八郎　1830（天保元）年、清川村（現庄内町清川）の裕福な酒屋の長男として生まれた。16歳で家出して江戸に上り、学問と剣の修業を積んで1人で両方を教える塾を開いた。その後、尊王攘夷（じょうい）の急進派と「虎尾の会」を結成。幕府に追われ潜伏しながら諸国を遊説し、討幕の志士を結び付けた。1863（文久3）年には幕府に働き掛け浪士組を組織したが、2カ月後に暗殺された。八郎の死後、浪士組は新徴組、新選組となり、明治維新を迎える。

多層民家の民宿に宿泊した翌朝、隣接する旧遠藤家住宅を見学し、六十里越街道の踏査に出発した　＝鶴岡市田麦俣

清河八郎「回天の道」

「元気・まちネット」踏査後半 同行記

近くにお花畑の絶景

出羽三山詣で 茂吉も宿泊

明治維新の魁（さきがけ）と呼ばれる清河八郎が江戸に向かった県内ルートを、鶴岡市出身の作家藤沢周平さんの小説「回天の門」を手掛かりに検証する「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、晴天に恵まれた早朝、同市田麦俣の多層民家の民宿を出発し、しばらく舗装された旧国道112号を歩いた。

田麦俣の小さな時計台のあたりに昔は番所があった。六十里越街道山船頭人（ガイド）の小野寺良寛さん（65）＝鶴岡市本郷＝は「家出した清河八郎が通った時には留守だったようだ。番所の役人は山を管理する山守を兼ね、不作の年に庄内の米が内陸に流れるのを防ぐといったことがなければ番所にいなかった」と説明する。

そこから古道へ入った。アリが地をはうように登山者が歩いたことから名付けられた急坂を一歩一歩登る。20分ほどで田麦俣の集落を一望できる弘法茶屋跡に到着。付近の道は人用と馬用の2本に分かれている。

鳥やエゾハルゼミの声を聞きながら汗だくになって進んだ。近くにわき水の独鈷（どっこ）清水がある独鈷茶屋跡を過ぎると、枝が四方八方に伸びた「千手ブナ」が現れた。その先の湯殿山道普請供養塔は長い間倒れていたが、鶴岡市朝日地域の有志によるアルゴディア研究会が2006年に引き起こして元の位置に立てた。

さらにブナの木々が美しいトンネルを作る小掘抜（こほのぎ）、大掘抜（おほのぎ）を通過。これらは人工の掘割だが江戸時代の記録に残っており、八郎もここを歩いたらしい。小掘抜、大掘抜を通った人たちは、道普請で広げてあったゴザの上にお金を置いていったという。

「今でいえば高速道路料金のようなものかもしれないが、強制ではなく、大変な作業をしている人たちへのせめてものお礼だったと思う。そんな気持ちに立ち返って貴重な歴史資産を次世代に残す活動ができれば」と隊員の佐野千晶さん（東京都渋谷区）。大掘抜は地元住民らが古道を整備した際、ぬかるんで歩けない状態になっており、水はけを良くするため土管を埋設する地下排水溝工事を施した。

大掘抜の辺りから道や谷に残雪が目立つようになった。踏査隊は出発から4時間余りで標高900㍍の細越峠に到着。そこにはブナ林に囲まれた広場があり、湯殿山の石碑が二つ立っていた。一つは四国の阿波石が使われ、北前船の帰り荷として船を安定させるために運ばれてきたと伝えられている。

細越峠を越えてしばらく下ると、お花畑の絶景に出合った。湯殿山をバックに黄色のリュウキンカと白いミズバショウが咲き誇り、隊員らは美しさに思わず息をのんだ。そこから間もなく、八郎が家出して最初の夜に泊まった笹小屋跡に着いた。

清河八郎は日記「旦起私乗」に、笹小屋について「主人は毎年夏になると親子で清川にも客引きに来ていたので面識があった」「泊まっているのは4、5人の馬夫や商人たちだった」などと書いた。

小野寺さんは昭和初期の笹小屋の写真を見せてくれた。明治ごろまで笹小屋は2軒あったらしいが、この時期には1軒になっている。1955（昭和30）年ごろに旧国道112号沿いに移ったという。上山市出身の歌人斎藤茂吉は1930（昭和5）年に長男を連れて出羽三山を詣で、この場所に泊まった。田麦俣から数えて5番目の茂吉の歌碑が立っている。

（文＝村山支社・伊藤哲哉、写真＝報道部・堀川貴志）

六十里越街道の「大掘抜」を進む。山をV字型に掘り抜いた道が続く＝鶴岡市

街道沿いにそびえ立つ「千手ブナ」。千手観音のように枝を広げた姿は壮観だ　＝鶴岡市

2 笹小屋

やがて六十里越街道の門柱がある蟻腰坂入り口に出て、ていた。茶屋の衛生面から人が歩く道に馬ふんが落ちないようにしたのだという。

茶屋は八郎が通ったころには既にあり、戦後も営業していた。「田麦俣の住民はこの茶屋まで団子を買いに来ていた」と小野寺さん。

隊員らは木漏れ日が差し込むブナ林を、野

清河八郎「回天の道」

「元気・まちネット」踏査後半 同行記

急坂、残雪 苦労を実感

新たな一里塚の発見も

3 大岫峠

清河八郎が郷里を出奔し江戸を目指したルートを検証する東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、八郎が家出して最初の夜に泊まった六十里越街道の笹小屋跡で昼食を取り、大岫（おおぐき）峠に向かった。

藤沢周平の小説「回天の門」によると、1847年6月14日（弘化4年5月2日）、まだ暗いうちに清川村（現庄内町）を出た清河八郎は、その日のうちに田麦俣（現鶴岡市）を通過し、笹小屋まで歩いた。翌日に国境の大岫峠を越えている。

清河八郎は日記「旦起私乗」に、笹小屋に泊まった翌日、雨の中を残雪でしばしば道に迷いながら険しい山道を歩いたと書いた。「六十里越の艱難（かんなん）は言葉に表せない」「（江戸に出て学問をする）志がなければ、とても一人では越えられない」とある。「回天の門」には上山に着いた八郎の回想として、つらい峠を越えてきた自分を思い、勇気を奮い起こす場面が描かれている。

16歳で家出し、江戸へ急いだ八郎の旅をできるだけ再現することが踏査後半の一つのテーマ。この日は早朝に田麦俣を出発し、通常のトレッキングコースの2日分の約18キロを歩いて西川町弓張平公園内のオートキャンプ場を目指した。大岫峠を越える時期も八郎と数日しか違わない。

踏査隊は笹小屋跡からしばらく平たんな道を進み、湯殿山の参道との分岐点を過ぎたあたりからやや急な坂に入った。登るにつれて残雪は深くなり、雪で道が寸断されている。やがて雪渓を歩くが、上り坂に加えて緩んだ残雪が滑りやすく体力を消耗する。おまけに雪の薄い所は踏むと陥没して足を取られた。

「八郎もさぞ四苦八苦したことだろう」と矢口さん。笹小屋を出て1時間40分後の午後2時ごろ、ようやく大岫峠（1140メートル）に到着した。田麦俣との標高差は800メートル。鶴岡市と西川町、庄内と内陸の境界で、江戸時代は国境だった。

今回の踏査では思わぬ収穫もあった。大岫峠を越えた一行は、西川側に入って雪に半分埋もれた一里塚を発見。土盛りをして街道の目印にしたもので、鶴岡から数えて10番目のこの塚はこれまで見つかっていなかった。同行した六十里越街道山船頭人（ガイド）の小野寺良寛さん(65)＝鶴岡市本郷＝は「この辺りにあることは分かっていたが、葉が生い茂っている時期は見つけにくい」と話す。

そこからは雪渓と所々ぬかるんだ道をひたすら下った。田代沢本流は雪解け水で増水し、川幅が6メートルにもなっていた。隊員らは靴を脱いではだしになったり、上流に回り込んでぬれずに済む場所を探すなどして何とか渡った。この前後には湯殿山や姥ケ岳を間近に望める場所がいくつかあり、月山スキー場のゲレンデを滑るスキーヤーの姿も点のように見えた。

緩やかな坂を延々と下り、いったん旧国道112号の舗装道路に出て志津の集落を通過。高台にある常夜灯や石畳が印象的な石塔坂を経て目的地の弓張平公園に着いた。田麦俣を出てから約9時間半が経過し、スキー、トライアスロンなどアスリートぞろいの隊員たちもさすがに疲れた様子。隊員の橋田秀治さん(61)＝東京都板橋区＝は「昔の人たちがこうした街道をよく歩いたものだと本当に感心した。道はよく整備され、六十里越街道に対する地元の人たちの思いを強く感じた」と語った。

（文＝村山支社・伊藤哲哉、写真＝報道部・堀川貴志）

大岫峠を目指し、足の疲労に耐えながら雪の急斜面を登る＝鶴岡市

標高1140メートルの大岫峠に立つ「元気・まちネット」のメンバー＝鶴岡市、西川町の境界

旦起私乗（たんきしじょう）　清河八郎の青少年時代の日記。天、地、人の3冊あり、全文漢文で書かれている。旦起は八郎の少年時代の号で、朝早く起きて勉強するという意味。数え年で17歳までは記憶をたどって書いたらしいが、18歳からは文字通り日々の記録となっている。県指定文化財で清河八郎記念館（庄内町）が所蔵。「回天の門」は八郎が家出した時の笹小屋から上山までの足取りがほぼ空白だが、この日記に記されている。21歳正月から23歳正月までの日記「私乗後編」もある。

清河八郎「回天の道」

「元気・まちネット」踏査後半 同行記

小説にない宿を確認

自由民権運動の拠点にも

寒河江市から山形市に移動した一行は「蔵王みはらしの丘」を訪れ、羽州街道を再現した石畳の道を踏み締めた　＝山形市松原

庄内町出身の幕末の志士、清河八郎の生涯を描いた藤沢周平の小説「回天の門」には、1847（弘化4）年に八郎が江戸に向かった際の情景が描かれているが、六十里越街道の笹小屋から上山までの足取りには触れていない。清河八郎記念館（庄内町）の初代館長で藤沢さんの恩師だった成沢米三さんの著書「明治維新に火をつけた男 清河八郎」によると、家出して2日目の宿泊先は寒河江の橋本屋という宿だった。

「回天の門」を手掛かりに八郎がたどった道を探る東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、鶴岡市田麦俣―西川町弓張平公園の六十里越街道を歩いた。

4 寒河江

寒河江市史編纂委員会の宇井啓委員長（右端）の説明を聞く隊員たち　＝寒河江市立図書館

翌日、寒河江市立図書館を訪れ、市史編纂（へんさん）委員長の宇井啓さん(74)＝同市六供町＝から話を聞いた。

宇井さんによると、寒河江はかつて出羽三山の参詣者らの宿場としてにぎわい、幕末には旅籠（はたご）が7軒あった。八郎が泊まったのは橋本屋権兵衛という所で「枕水楼（ちんすいろう）」とも称した。「橋本屋は酒屋を兼ねた大きな宿屋で、米沢藩士で幕末・維新期の志士、雲井龍雄も宿泊した。明治時代には自由民権運動演説会の定例会場にもなった」と宇井さん。

八郎のように笹小屋に前日泊まった人の多くは、白岩か寒河江の宿を使ったという。寒河江から江戸に向かう場合、翌日は上山に泊まることが多く、八郎が家出した際の「回天の門」の記述と重なる。八郎は日記「旦起私乗」に、寒河江から長崎（中山町）、船町（山形市）を経て山形の市街に入り、松原の番所を通って上山に着いたと記録している。

一行は上山に向かう途中、山形市で司馬遼太郎・藤沢周平文学研究会の佐竹迪代表(82)＝同市久保田2丁目＝と会い、清河八郎の人物像などを語り合った。策士、変節漢とも呼ばれる八郎だが、佐竹さんは「多くの盟友を持ち、決して同志を裏切らなかった。一介の浪士なのに孝明天皇に手紙（「回天封事」の建白書）を書き、しかも天皇から返事をもらうというスケールの大きさがあった」とその魅力を力説する。

藤沢周平と同じ年に生まれ、旧山形師範学校でも同じ学年だった佐竹さん。藤沢文学については「業績や史実だけでなく、心の奥に潜んでいるものを大事にしている。そうでなければ『回天の門』は書けなかったのではないか」と語る。

隊員らは鶴岡市田麦俣を出発する前日、同市の藤沢周平記念館を訪ね、清河八郎に関する藤沢のエッセーなどについて説明を受けた。

エッセー集「周平独言」に収められた「三人の予見者」で藤沢は、同じ庄内生まれの八郎と軍人石原莞爾、思想家大川周明の共通点を分析し、空疎な権威を愚弄（ぐろう）する庄内人独特の気質を指摘している。「回天の門」には、やはり八郎が持つ庄内人気質として、自我を貫くには何者も恐れない「ど不敵」という言葉が出てくる。

踏査隊は八郎が歩いたであろう旧羽州街道をたどり、山形市松原へ。山形ニュータウン「蔵王みはらしの丘」の公園内に「羽州街道 三八茶屋跡 八兵エ茶屋跡」の看板がある。そこは「坂の上」と呼ばれ、七曲がりの山道を登ると山形を一望できる所に2軒の茶屋があったという。近くに古井戸もある。

このニュータウンでは、開発に伴う遺跡発掘調査で羽州街道の一部が玉石を敷き詰めた状態で発見された。2007年度に県は街道の面影を残す道を整備。住民も参加し、その一部に玉石を並べた。隊員らは再現された羽州街道を歩き、幕末の旅の様子を思い描いた。

（文＝村山支社・伊藤哲哉、写真＝報道部・堀川貴志）

清河八郎「回天の道」

「元気・まちネット」踏査後半 同行記

鶴岡市出身の作家、藤沢周平の小説「回天の門」には、清河八郎が家出して江戸に向かう際、上山の宿で畑田安右エ門が着くのを首を長くして待つ場面が出てくる。

畑田は庄内藩の下級家臣で清河八郎に郷里で学問を教えた。八郎は江戸詰が決まった畑田に頼み込み、上山で落ち合って一緒に江戸へ行く計画だった。しかし畑田の江戸詰は急に取りやめになり、代わりに来たのは八郎を呼び戻すため家族が走らせた使用人の惣助。八郎は決心が固いことを父に伝えてもらい、1人で江戸へたった。

八郎の旅日記「西遊草」の編訳などもした小山松勝一郎さんの著書「清河八郎」によると、八郎が上山で最初の夜に泊まった宿は中村屋。惣助と会ったのはその翌日で、花街の騒がしさを避けて上山の別の宿屋に移っていた。

1855（安政2）年の東講商人鑑（あずまこうあきんどかがみ）は、江戸時代の上沢村出身）の踏査隊は、上山市の旧羽州街道や武家屋敷通りを歩き、城下町、宿場町の面影を楽しんだ。

現在、武家屋敷が並んでいる近辺に上山藩の重臣金子与三郎の家があった。横浜を襲撃し攘夷（じょうい）、討幕の行動を起こそうとしていた清河八郎は1863年5月30日（文久3年4月13日）、麻布にあった上山藩上屋敷で金子と会った直後、屋敷前の一ノ橋を渡ったところで幕府の刺客に暗殺された。

一行は上山市立図書館を訪ね、片桐繁雄館長(76)に幕末の上山や金子与三郎について話を聞いた。

「金子は幕末の上山藩の政治と文化のリーダーだった」と片桐さん。農政や兵制などに画期的な業績を残し、長岡藩の河井継之助と並び称された。著書「杞憂臆策（きゆうおくさく）」では、幕府に海防の必要性などを進言している。上山藩、庄内藩などが1868（慶応3）年に江戸の薩摩藩邸を攻撃した際、敵の銃弾を受けて重傷を負い、翌日数えの45歳で没した。

金子与三郎が清河八郎暗殺に関与したかどうかについてはさまざまな説がある。

「回天の門」には、幕府が金子に八郎謀殺を相談したことや、八郎が浪士組とともに京都へ上る際、著述したものを金子に預けるなど親交が深かった様子が描かれている。片桐さんは「幕府が開国して外国と争わない方針だったのに対し、清河八郎は攘夷の過激な動きを狙っていた」と話し、幕末、幕府に重用された上山藩の中老だった金子と、討幕を目指す八郎とでは意見が対立したと指摘する。

庄内町の清河八郎記念館には、八郎が暗殺された際に持っていた連判状のコピーが展示されている。実物は八郎の同志だった幕臣の山岡鉄舟が「尊攘遺墨」として保管していた。「八郎は金子に名前を書かせるつもりで連判状を携えたが、説得できなかったのではないか」と同記念館の広田幸記常任理事(65)。約160年前の江戸で、清河八郎と金子与三郎はどんな会話を交わしたのだろうか。

「まちネット」の踏査は上山が終点。矢口さんは「清河八郎が寒河江、上山で泊まった宿など『回天の門』に書かれていないことも分かり、大きな収穫だった。古里にはまだまだ掘り起こしきれない地域資源が眠っていると実感した」と満足そう。4月の庄内町に続き、12月には東京で清河八郎をテーマにしたシンポジウムを開く。

（文＝村山支社・伊藤哲哉、写真＝報道部・堀川貴志）

城下、宿場 残る面影

八郎暗殺関与か 藩重臣について聞く

上山市の武家屋敷を訪れ、城下町の面影に触れる踏査隊員たち ＝同市鶴脛町1丁目

5・完 上山

かつて羽州街道だった商店街を歩く。この辺りに清河八郎が泊まった宿屋があった ＝上山市十日町

山の様子を伝える貴重な史料だ。街道沿いに宿屋、商家などが並び、参勤交代や出羽三山の参詣者で栄えたことがうかがえる。中村屋は上山城の大手口に入る角に近い羽州街道沿いにあった。今でいえば中心街の火の見やぐらの数軒隣ということになる。

清河八郎が家出して江戸を目指したルートを探る東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸